

フランス—アメリカ関係史——この「危険な関係」

宇 京 頼 三

はじめに

ニューヨークのツインタワー崩壊という衝撃的な「9・11」テロ、ウサマ・ビン・ラディンのアル・カイダ征伐・追討のアフガニスタン戦争に続いて、イラク戦争に突入する前、アメリカはフランスとドイツを中心とするヨーロッパと（無力化した）国連を舞台とする国際社会で激しく対立した（もっとも、こうした対立は今に始まったことではなく、一八世紀の昔からの、大西洋を境にした新旧両大陸世界の対立まで遡る）。なかでも、フランス大統領シラクとアメリカ大統領ブッシュは政治的信条や立場はもちろん、あらゆる面でことごとくぶつかり、その違いやずれが際だって見えた。この頃、フランスとアメリカの不協和音は政治外交面のみならず、両国の社会的風潮としても最高潮に達していたのである。

例えば、二〇〇三年冬、イラク開戦前、ブッシュはシラクを自陣営に引き込むべく最後の試みをした。その際、ブッシュは「ならず者国家」、*「悪の枢軸」*を弾劾しつつ「ゴグとマゴグ」という謎めいた語句を挙げ、シラクを啞然とさせた。シラクは何のことか分からず、秘書官に尋ねたが、これも分からず、結局はフランス・プロテスタント連盟に問い合わせた。「ゴグとマゴグ」とは、サタンに惑わされ神の王国を相手にアルマゲドンで戦う二つの国の民のことだという。シラクがフランス草

命以来、*「laïcité* 非宗教性」世俗性を国是とするフランス共和国の元首であり、ブッシュが一八世紀のアメリカの建国以来の宗教的伝統を引き継ぐ強力な保守的福音派（信者は世界で約五億人という）の「ボーン・アゲイン」の一人であるとはいえ、これでは仏米大統領の個人的資質の違いを超えても理解し合えるはずがなく、仏米の「危険な関係」が生まれて当然であろう。また当時、アメリカではフランスの銘酒ボルドーやブルゴーニュ産ワイン、高級酒のシャンパンが割られ捨てられたり、フォワ・グラやエスカルゴが輸入禁止になったり、その他のフランス製品がボイコットされた——ちなみに、ブッシュ政権は今、他国を「ならず者国家 *rogue state*」呼ばわりするが、かつては独立まもないアメリカも、世界貿易市場を奪うためにどんな軍事的冒険も辞さない「未成熟な」ならず者国家と見なされていた。

ところが、フランスは歴史上一度もアメリカと戦争をしたことはない。フランスは、一八世紀にアメリカが独立する際にラファイエット將軍をはじめとしてアメリカを助けたことはあっても、「宗主国」イギリスはもとより、他のヨーロッパ諸国ドイツ、スペイン、イタリアなどのように、かつてアメリカと戦ったことは一度もないのである。しかるに、フランス、アメリカの双方には、一八世紀から連綿として続く反米感情、反仏感情がまるで代々伝わる伝統的な家具であるかのように存在しているのである。いわば彼ら両国民のDNAなのである。これが歴史の

節目、節目に浮上してくるのである。なぜであろうか。その原因、理由となるものは歴史・政治・経済・社会・文化的領域の多岐にわたって多種多様な形を取り、その根は深く、複雑に絡み合っている曲がり、解きほぐすのは容易なことではない。そのうえ、フランスにおける反米感情はさらに遠く反英感情にまで遡り、イギリスにおける反仏感情も関係すると思われるので、問題はさらに厄介である。この「危険な関係」はイギリス・アメリカ、換言すればアングロ・サクソンとフランスの歴史、即ち周辺諸国を巻込んだヨーロッパの歴史に深く根ざしているのである。

例えば、仏米間には一度も戦争がなかったと述べたが、歴史を顧みて正確を期すれば、アメリカの歴史家のいう「宣戦布告なき戦争」(Undeclared War)が一八世紀末に起こっている。フランスの歴史家ジュール・ミシュレはフランス革命たけなわの一七九〇年をフランス革命と連盟祭を称える幸福感の絶頂の年としたが、この年はベンジャミン・フランクリンの死去した年でもあり、当時の革命政府はその死を悼んで三日間の喪を布告した。国民議会は、新大陸の若き共和国の政府代表としてパリに滞在し、フランス革命遂行に寄与したこの避雷針の発明者の死に深甚なる弔意を表したのである。しかし、こうした仏米の蜜月関係も、フランス革命が急進化し恐怖政治が布かれるに及んでアメリカの連邦政府の共感・支援が弱まるとともに、次第に熱気を失っていった。

そしてアメリカがイギリスと「ジェイ条約」(一七九五年)という秘密協定を結んだことが発覚すると、仏米友好関係は一举に破綻したのである。これは英仏間の戦争中に締結された条約で、米英間のさまざまな懸案事項を解決するものだった。パリの総裁政府は報復措置としてアメリカの船舶の出入りを禁止し、駐仏大使のアグレマンを拒否した。そして、いわゆるフランス外相タレーランの謀略による「XYZ事件」(一七九七

年)が起こり、アメリカ側でも、非公式ながら制裁金と賄賂を要求したと言われるタレーランの書簡が議会で公表されると、対仏感情が悪化し、一七七八年の仏米同盟条約は破棄された。これはアメリカ独立戦争中に結ばれた同盟で、イギリスを共通の敵とし、仏米は同意なしに単独講和を結ばないことが定められており、この条約によりフランスはアメリカ独立戦争の勝利に大きく貢献したのである。フランスからすれば条約違反、裏切り行為であり、「恩知らずな」アメリカに激怒し、激しい反米キャンペーンを展開した。そしてフランスの私掠船(政府の認可状を得て武装し、敵国の商船などを襲う民間船。海賊船)がアメリカの船舶を襲撃するようになった。つまり、両国は非公式の交戦状態に入ったのである。アメリカの独立戦争、フランス革命と続いてきた良好な関係がもろくも崩れ去り、この頃から両国に敵対的感情が生まれたのであろう。「危険な関係」の始まりである。

さて、以下はまずプロローグとして、この複雑なフランス・アメリカの「危険な関係」を象徴的に物語る出来事や、関連するエピソードを幾つか取り上げ、この容易ならざる関係の端緒を探って見よう。

※ ※ ※

ところで、南北アメリカ大陸が一般の世界史に登場するのは、コロンの発見後、アメリカゴ・ヴェスプッチが新大陸を認め、ヴァスコ・ダ・ガマが東方航路を発見し、マゼランが世界一周するいわゆる大航海時代からであるが、歴史年表(『英米史辞典』、研究社、八七五頁)を見ると、次のように太古の昔から人類はこの両アメリカ大陸に存在し足跡を残している。

紀元前一五〇〇年以前 モンゴロイド一部、アジアからベーリンジアをへて北米大陸へ

一二〇〇〇—一〇〇〇〇年 大動物狩猟民のクローヴィス人、北米大陸で活動

一〇〇〇〇—八〇〇〇年 大動物狩猟民フォルサム人の活動、アメリカ大陸に拡がる

五〇〇〇—三〇〇〇年 トウモロコシの栽培、メキシコ中央高原を中心に発展

二〇〇〇年 このころ、メキシコのテワカン盆地に定住農耕村落出現

一五〇〇年 このころ、ミシシッピ川流域にトウモロコシ農耕と土器の使用始まる

一〇〇〇年— オハイオ川とミシシッピ川流域を中心にマウンド文化栄える

四大文明（メソポタミア、エジプト、インダス、黄河）が興るのは紀元前四五〇〇—二五〇〇年、イベリア人がブリテン島に来住するのは同じく二五〇〇—一五〇〇年、ケルト人がブリテン島に来住するのはさらに遅く紀元前七〇〇—三〇〇年であるから、年表上では北米大陸にはイギリスよりもはるか以前に人類が出現していたことになる。しかし、これ以降アメリカ大陸はコロンブスの発見まで何千年もの間世界史年表から消えるのである。新大陸として再登場するのは一五世紀末からの大航海時代である。もう一度前記の年表を見ると、こうある。

一四九七年 ジョン・ガボット、ヘンリー八世の命で北米大陸北東岸に上陸

一四九八年 ガボット第二回航海、チェサピーク湾まで南下

一五〇九年 セバステイアン・カボット、ハドソン湾に到着と主張

一五一三年 ポンセ・デ・レオン、フロリダ湾岸を探検

一五一九年 コルテス、メキシコに侵入し、アステカ帝国征服を開始

一五二四年 ヴェラツァーノ、フランス王の命で北米海岸を探検

一五三三年 スペイン人ピサロ、インカ帝国を滅ぼす

一五三四年 カルティエ、フランス王の命で第一回北米探検

一五三五年 カルティエ、第二回北米探検、セントローレンス川をさかのぼる

これを見てまず気が付くことは、フランスの新大陸探検がイギリスやスペインに四半世紀も遅れていることである。しかも、フランス王から派遣されたのはイタリア人探検家である。だがフランス側の年表を見ると、一六世紀の初めから、フランス人の、鱈漁の漁夫や毛皮猟の猟師がセントローレンス湾に出没していたし、また後述するように、一六〇四年のフランス人のアメリカへの入植開始はイギリス人よりも三年早く、アメリカ建国に貢献したのはわれわれの方が先だとなる。このことはイギリス側の年表には現れない。その逆に、フランス側の年表にも現れないこともある。つまり、国家の正史という歴史記述とは勝手なもので、フランス人はトリコロールに、イギリス人はユニオン・ジャックに誇りをもつのであろう。ちなみに、この両民族よりもはるかに早く、おそらく十一世紀頃、ノルマン人（ヴァイキング）がカナダ東岸に達していたとも言われている。

確かに、一五六四年にはフランスのユグノー教徒がフロリダに入植し（これは一年後にスペインに排除されるが）、一六〇三年にはサミュエル・ド・シャンプランがセントローレンス川を探検している。そして後には

フランスの植民政策も強まるが、フランスには「メイフラワー号」はなかった。イギリスに比べれば、フランスの姿勢はやはり相対的に保守的・消極的で、これが後々まで影響を及ぼしたように思われる。なるほど、一六世紀のフランスには宗教改革の真っ只中の戦国時代であったという国内事情があった。だがイギリスも似たようなもので、バラ戦争が終結してチューダー朝が開かれたものの、王位争いは続き、宗教的な対立も加わり、国情は不安定だったのである。一七世紀になると、イギリスは一六〇七年のヴァージニア植民地建設開始をはじめ、マサチューセッツ湾、メリーランドなど着々と植民事業を進めている。一方、フランスは一六八一年、ミシシッピ川三〇〇キロ以上をカヌーで下ってメキシコ湾にまで至り、ルイジアナの名付け親となったフランスの探検家ルネ・ロベール・カヴリエ・ド・ラ・サルがルイ一四世にこのことを報告しても、国王は感心を示さなかったという。こうした遅れは、ナントの勅令の廃止（一六八五年）に伴いユグノーが国外に流出して産業革命にも遅れをとったことや、ナポレオンが一九世紀初め、当時フランスが領有していた、広大なルイジアナ州（これは現在のルイジアナではなく、アメリカの国土の中央部三分の一を占める）をアメリカ新政府に殆ど二束三文で売却したことなどと相俟って、大英帝国の覇権を許すことになり、結局はアメリカ大陸における植民地獲得競争に負け、後の影響力も劣ることになるのである。

この新大陸における劣勢は時代が下るとともに、具体的な形としてもろに現れてくる。一九世紀初め、アメリカは遠く、最適条件でもひと月の航海が必要で、状況が悪ければ八週間もかかったという。情報が伝わるのも同じ速度で、公文書のやり取りはたっぷりふた月を要した。ところが、一八三〇年代にクリッパー（高速帆船）が登場し、やがて蒸気船

がこれに取って代わると事態は一変する。約二週間で大西洋を横断できようになるのである。残念ながら、フランスはここでもイギリスに大きく遅れる。イギリスからの大西洋航路横断の定期船が就航したのは一八四〇年だが、フランスからのそれはやはり四半世紀遅れの一八六四年である。このタイム・ラグのもつ意味はとてつもなく大きい。人の行き来が遅れることは、情報の伝達も遅れ、相互理解も遅くなるのである。仏米の場合、理解どころか誤解、判断ミス、先入観などを生じやすく、意図せざる「危険な関係」にも繋がることになる。そうでなくても、一九世紀前半は国際情勢もあって仏米関係がいわば相互的無関心、一種の弛緩期に入り、交渉が薄れる。しかも驚くことに、一八四〇年代までは、フランスが得るアメリカの情報はフランス革命以前の知識・情報に基づくもので、ものによっては半世紀前のものであったという。つまり、フランス人にとってアメリカ大陸というのは、「大西洋海岸からずっと内陸部まで続く、広大な原始野生の森」だったのである。ところが、奇妙なことに、この間に啓蒙の世紀に培われたルソー的な「自然人のアメリカ人」という牧歌的なイメージが変わるのである（これは後述するが）。

二〇〇四年一〇月九日、惜しくも病で死去したジャック・デリダは、ある対話で「9・11」という「出来事」についてどう思うかと問われ、こう答えている。彼はまず、この「9・11」という日付の名指し行為そのものから検討をはじめ、「ひとつの日付を歴史のなかに刻印する」と何が意味するのか、そうした「言語行為、名指し、日付付与といった現象、あの反復強迫」が意味・翻訳・暴露する事柄を思考すべきであると促している。そして「9・11」は最も重要な歴史的な出来事の一つではないかという質問者の問いに否定的に答えている。確かに、「9・

11」というような日付とは違い、上記の歴史年表で見たような漠然かつ曖昧で、生身の実体を欠いた日付は、デリダの言う「歴史のなかに刻印する」ほどの日付ではなく、歴史というはるか遠くの時空間の波間に漂う、人類の残した漂流物にすぎないであろう。しかし、フランス—アメリカ関係史という時間軸を通して、それをスペインの広い近接過去の観点から見るとデリダの言う意味での「日付」が幾つか思い浮かんでくる。

例えば、二〇〇四年は奇しくも、一六〇四年、フランス国王アンリ四世の名において、フランス人入植者がアメリカ大陸にはじめて根を下ろしてから四〇〇年。ナポレオンがメキシコ湾岸のミシシッピ川河口からカナダ国境の今のモンタナ州までを擁する広大なルイジアナをトマス・ジェファソンのアメリカに売却して二〇一年。さらに、メリウエザー・ルイスとウィリアム・クラークの両大尉がジェファソンの命を受けてミシシッピ川を遡る大陸横断の探検を行い、西部征服とアメリカ「帝国」建設の糸口を開いてから二〇〇年である。

以下は、こうした「歴史のなかに刻印された日付」をもとにして、そうした「出来事」がフランスとアメリカの関係史においていかなる位置を占め、どのようなものであったかを見ておこう。

二〇〇四年九月、カナダ大西洋岸の州の一つのノバスコシアの東部、サント・マリー湾周辺におよそ百ばかりの異なる系譜に属する約五万人が集まった。彼らがシャルル湾（カナダ）の小さな港やルイジアナの湿地帯、モントリオールやボストンの郊外からやってきたのは、多くはヴァイオリンとアコーディオンに合わせて、北アメリカ大陸におけるフランス人の最初の入植地建設四百周年を祝うためであった。パリではほとんど忘れ去られた記念日だが、フランス人が一六〇四年六月二十六日、この

新大陸にはじめて足を下ろし、定着したのはそこ、正しく言うと、メイソン州（米）とニューブランズウィック州（加）の境の、ファンデュー湾上に浮かぶ小島サント・クロワである。アンリ四世の命を受けて、この地を踏んだのはプロテスタントのピエール・デュ・ギユア・ド・モンなる人物で、彼は「新世界」の国王代理人に任ぜられ、親任状を携え、とくに毛皮取引の独占権を与えられていた。この荒涼とした砂利混じりの地から、後にシャトーブリアンが、「フランスはその昔、北アメリカで、ラブラドルからフロリダまで、大西洋の海岸からカナダ内奥部の湖（オンタリオ湖）までを領有していた」と語る、「ヌーヴェル・フランス（新フランス）」の世界が広がっていくのである。まさにここから、七〇〇万のフランス語話者のカナダ人、八三〇万のフランス出自のアメリカ人が生まれ出るのである。

それは、イギリスの最初の植民者がジェームズタウン（ヴァージニア州）に定着する三年前、メイフラワー号の分離派ピューリタンが一六二〇年、プリマスに到着する一六年前のことだった。それゆえ、フランス人からすると、アメリカを発見はできなかったが、それを建設したのはわれわれだとなるのだろう。だが、現在なら当然予想されることながら、初期の入植者、開拓者の状況は悲惨なものだった。彼らには、一年のうち三分の二を占めると言われるほど長い冬、凍てつく風がアルコールを凍らせるほど過酷な冬に対する備えがなく、食料は底をつき、とくに壊血病が大量死をもたらしたのである。サント・クロワの小島の居住者八〇人のうち、三六人は冬を生き残れなかった。翌年、約四〇人の交代要員がきてやがて探検が再開され、ボストン沖の現在のコッド岬まで南下するが、デュ・ギユアとその部下はサント・クロワの方へ立ち戻り、この小島と向き合った、現在のノバスコシア州の別の居住地に移り、そこ

をポール・ロワイヤル（今のアナポリスロイヤル）と命名した。そしてここがアメリカ大陸におけるフランス植民地開拓の真の出発点、前進基地となるのである。

以後、ルイ一四世時代にフランスのアメリカ植民政策も相対的に活発となるが、イギリスがフランスよりもはるかに大量の入植者を送り込み、この新大陸における植民地獲得競争においてイギリスが優勢になるまで、両国の争いは大陸だけでなく、地中海、大西洋においても続く。だが今でこそアメリカ大陸は英語圏であるとはいえ、フランスの果たした役割は大きく、残した足跡は深い。だがその大半のことは忘れ去られている。

例えば、誰が今、セントルイスやバトンルージュ、モントリオールやニューヨークがフランス語起源であることを知っているだろうか？ またデトロイトはフランス人によって建設されたことを誰が覚えているだろうか？

（このフランス語とアメリカ、カナダの関係についてはこれも後述する）しかしながら、歴史は続いており、その象徴的な例が北アメリカのジブラルタルと言われたルイスバーク（現在のケープブレトン島）の要塞であろう。長らく忘れられていたが、これは一七一三年フランス人によって建設されたもので、一七五八年イギリス人によって征服されて後、用済みになると放置されていたが、一九二八年、ボストンの裕福なアメリカ人の篤志によって再建された。ここはアメリカを巡るフランスとイギリスの争いの要となったところであろうが、この文脈で「歴史に刻印された日付」として忘れてならないのは、一七一三年のユトレヒト条約と一七五五年のフレンチ・インディアン戦争であろう。

ユトレヒト条約はスペイン継承戦争を終結させた講和条約だが、一八世紀の国際関係を規定したものとして重要である。厳密には、両陣営諸国間で締結された一連の条約を指すが、この条約は英仏間のアメリカ領

有関係に大きく影響した。イギリスはその最大の受益者だが、フランスにハドソン湾地方、ノバスコシア、アカディア、ニューファンドランドなどを譲渡させ、北アメリカ植民地における地歩を固め、優位に立った。しかも、スペインからは中南米植民地へ奴隷を供給する独占権（アシエント）を獲得し、ジブラルタルとミノルカ島を割譲させ、地中海の制海権を確立した（ジブラルタルは今でもイギリス領である）。

フレンチ・インディアン戦争（一七五四—一七六三年）とは、ヨーロッパで起こった七年戦争がアメリカに飛び火した、いわばその北米大陸版であり、フランス・インディアン連合軍とイギリス・北米植民地軍が戦ったもの。詳細は避けるが、この戦争は北米大陸における四回の英仏植民地争奪戦の最後のもの、その影響も大きかった。結果はイギリス・北米植民地軍の勝利に終わったが、フランスはカナダをイギリスに譲渡し、大陸から撤退せざるを得なくなった。そのお陰で、北米植民地はフランスの脅威から脱し、この戦争で財政困難に陥ったイギリスの植民地統制政策の強化に抵抗して独立への道を歩み始めたのである。だが最も大きな被害を被ったのは、ノバスコシアのアカディア人（初期に入植したフランス人の子孫、フランス系カナダ人）たちである。

一七五五年七月二八日、彼らアカディア人は中立を表明していたにも拘わらず、一万三〇〇〇人が強制退去させられ、アメリカ中に散らばり、中にはフランスに戻る者さえあった。彼らの家は戻ってこないよう焼かれた。彼らはこれを「大離散 le Grand Derangement」というが、まさにユダヤ人のディアスポラ（民族四散）さながらである。今日では、カナダのアカディア人は約四万人だが、離散して全米各地に住むその子孫・係累が前記の四百周年を祝うために駆けつけてきたのである。だが歴史は記念日を祝うためにのみあるのではない。彼らの歴史、フランス人植

民者の歴史は意外な形で続いているのである。現在、この一七五五年の強制移住に関して悔悟を表明するよう英国エリザベス女王に対して訴訟が起こっているという。しかも、訴えたのがルイジアナ州南部の町ラファイエット生れのアメリカ人弁護士ウォーレン・ペランなる人物だと言うから、何とも象徴的である。

長い交渉の末、オタワ政府がやっと公式にこの要請をロンドンに伝えることになった。そして二〇〇三年二月九日、「カナダ女王」エリザベスは「忠誠なる臣民に宣告」を發した。「大離散のみぎり、アカディア人が被った試練と苦悩を認め、アカディア人がこの歴史の暗い時代を超えるよう望みつつ」、女王は七月二八日を「大離散記念日」にするとした。だが女王陛下は慎重にも「法的または経済的な責任の認知」は一切受け入れなかった。宣告文は女王の手になるもののように思われるが、署名は総督のものであったので、全国アカディア協会は、来年の強制移住二五〇周年の祭に、女王自身がこの宣告文を公式の場で読み上げるよう要求しているという。四世紀前のフランス植民者の靈魂は何代も何代もの子孫を経て今なお、現世に鎮魂を求めているのだろうか。

さて、歴史は別なところからも今に続いている。ナポレオンのルイジアナ売却である。アメリカ側からすると、これはルイジアナ購入 Louisiana Purchaseとなるが、前述したように、このルイジアナは現在のミシシッピ河口の小さなルイジアナではない。南北はカナダ国境からメキシコ湾まで、東西はロッキー山脈からミシシッピ川までに拡がる今のアメリカ中部の三分の一、一三州を占め、フランスの国土の三倍である。このルイジアナを巡るエピソードはフランスとアメリカ、さらにはイギリス、スペインとの関連で興味深い。

このアメリカ南部にも勿論、先住民がいた。紀元七〇〇年頃から神殿マウンドを特色とするミシシッピ文化が栄えており、チョクトー族やナチエズ族がその後裔であるという。この地が歴史に再登場するのは一六世紀。最初にこの大陸中央部に冒険を試みたのは黄金を見つけようとしたスペイン人である。だが彼らは黄金どころか、黄色熱に罹って倒れ、その死体がミシシッピ川に流されるだけだった。以後、イエズス会の伝道師たちの運命も似たようなものだった。前記の探検家ラ・サルが登場するのはこの世紀後半になってからである。このルーアン出身のフランス人は当初カナダに来て、セントローレンス川のモントリオール島の上流部を拠点にして、幾つかのインディアン語を覚え、一六六九年頃からオハイオ川、五大湖周辺などを相次いで探検した。彼が探し求めていたのは太平洋に通じるルートだが、当時ミシシッピ川は西に下り流れ、カリフォルニアあたりで海に注いでいると思われていた。ある時彼はこの大河を下ってみようと考えた。この頃の大陸南部は未開拓で、イギリス、スペイン、フランスの冒険家や毛皮目当ての海狸獵師、脱走兵などが跋扈しているだけであった。あるインディアン部族の食料置き場には人肉が乾燥させてあったという。

それでも、ラ・サルは約三〇人の仲間とミシシッピ川を下っていった。そしてある日、川の水が塩辛いことに気がついた。メキシコ湾岸に広がるデルタ地帯に到達したのである。そこで彼は、海沿いの場で銅鍋にルイ一四世の紋章を刻ませると、樅の木に打ち付け、「ここをルイジアナと命名する」と宣言した。勿論、この名はルイ一四世に敬意を表したものである。これで、この広大なルイジアナはフランス王領となったのである。ところが、前述したように、彼がヴェルサイユに報告しても国王の覚えはめでたくはなかった。必死になって説得して、彼はやっと二度

目の探検隊の派遣に成功し、約百名の志願者と二隻の船でルイジアナを目指した。だがメキシコ湾岸にたどり着いたものの、六百キロメートル近くあるミシシッピ川河口で迷ってしまい、北上する水路が見つからなかった。そうこうする内、乗組員が次々と死に、ラ・サルは生残り組の反乱にあって、一六八七年に殺されてしまった。以後しばらく、ルイジアナは忘れられ、時々イギリス人が湾内を行き交うだけになる。

一六九九年、ピエール・ディベルヴィル率いる新たなフランス探検隊の船がミシシッピ河口に現れた。今度は運良くこの大河の進入水路を見つけて北上し、美しい湾曲部に至ると、そこに定着しニューオリンズを創始した。この名称は摂政オルレアン公フィリップに捧げられたものである。フランス語名はヌーヴェル・オルレアンである。この町の骨格が建設されたのは後の一七一八年である。

フランス人はこのアメリカ南部の地をしようとしたのか。スペイン人と同じく金鉱山の富を夢見たのである。しかし、そこは鱈が出没し、蚊や蚋がひしめき飛ぶ沼地で黄色熱に罹らないようにするのがやっとであった。幸いにも、温厚な性質のチヨクトー族がトウモロコシ（インディアン的小麦）の栽培を教えたが、この植民地は何ももたらさず、ひどく高いものについた。フランスから絶えず物資や食糧、人員を送らねばならず、うんざりしたルイ一五世はこの王領の開発独占権をスコットランドの金融家ジョン・ローに売り飛ばしてしまった。だがこれも成功しなかった。さらには、別の切実な必要性が加わる。当然ながら、探検隊は男が中心である。しかし、植民地社会を築き生活を営むためにはどうしても女性がいなくてはならない。そこで、ニューオリンズにはフランスの没落した良家の孤児同然のうら若き娘たちが送られた。だがこの「箱入り娘」たちがチヨクトー族の野生の美女たちを相手にしていた荒くれ

男の冒険家と合うはずはなかった。絶望、自殺の連続であった。そこで別の策が講じられた。獄中にいる塩の密売女や売春婦が強制的に荷馬車に乗せられ、フランス西部のラ・ロシエルの港町から新世界に送り込まれたのである。まるでマノン・レスコーの物語である（もっとも、現実のマノンたちは砂漠で渴き死にすることはなかった。ルイジアナはどこにでも水があったのだ！）。今日、この地で「クレオール」と呼ばれる家庭の祖先の一方は実は大半がこうした「お嬢さん」たちであった。

しかしながら、人口は少しづつだが増えていき、転機が訪れる。一七三〇年頃から、綿花のプランテーションがあちこちに生まれ、ルイジアナは「白い黄金」を発見したのである。勿論、これには黒人奴隷制度という長く、暗い影が付きまとう。初期の奴隷はイギリスの植民地を経由してアフリカから来た。しかし、フランス人もルイジアナに奴隷を輸入していたのである。ルイ一四世は奴隷売買に反対していたが、ルイ一五世は自由放任だったという……だが綿花産業は十分ではなく、ルイジアナは依然として王国にとっても高くついた。一七六二年、フランス国王はこれを隠密裏に従兄弟のスペイン国王にプレゼントしてしまった。ルイジアナでは、いわば一夜にしてポルドーワインがスペインワインに代わってしまったのだ！もっとも、しばらくは船舶は白百合のフランス国旗を掲げ、フランス語も公式用語として残されていたが。その後、事態を知ったルイジアナのフランス人は激怒し、スペイン人を船でキューバに追放し、フランス国王に直訴したが、国王は謁見さえ認めず取り合わなかった。一部のルイジアナ人は独立共和国の設立さえ考えたという。だが事態は変わらなかった。

アメリカ北部では独立戦争が起こり、ヨーロッパではフランス革命が勃発し、やがてナポレオンが登場するに及んで事態が急展開する。ボナ

パルトは当初、新大陸における格好のフランス基地となるはずのこの領有地がなぜスペインに譲渡されたのか分からなかった。だが一七九六年、彼はフランスとスペインの条約に、ルイジアナのフランス返還を想定した秘密条項があることを知った。一八〇〇年、彼はこれも秘密協定（サン・イルデフォンソ条約）によって、この譲渡条項を確認し、イタリアのパルマ公国と交換にルイジアナを取り戻したのである。ルイジアナはまたフランスに戻ったが、今度も誰も知らなかった！

しかしながら、一八〇二年、第一執政官はフランス革命戦争を終結させたアミアン条約によりイギリスと和解したにも拘らず、戦争の再発を予想し、ルイジアナが攻撃されれば守りきれないと判断した。また、カリブ海に派遣していた軍隊が、とくにハイチで熱病のために壊滅的な打撃を受けたという偶然の一致もある。後年、セント・ヘレナ島で語ったというナポレオン自身の証言によれば、ルイジアナを売ったのは、若いアメリカ合衆国を強化し、イギリスと競うような強力なライバルになるよう支援するという政策のためだったという。今からすると、とんでもない間違った戦略判断、誤った政策であり、またナポレオンらしい愚かな私利私欲も働いていた。つまり、彼は翌年に迫った自らの皇帝戴冠式のために金を必要としていたのである。もっとも、後世の歴史の展開を見ると、アメリカがイギリスの強力なライバルになるというナポレオンの予想は当たったが。

確かに、クックの三度目の探検以来、北アメリカ大陸の規模・大きさは概ね分かっていたが、まだ人々の思考・感覚は南北を軸にしたもので、東西の横軸でものを考えることはなかった。ましてや、二つの大洋の間の空間を埋め、そこにその徳をあまねく施すというあのアメリカ人の「マニフェスト・デステイニー」はまだ生まれていなかった。この北米

新大陸が東西約五〇〇〇キロにもおよぶ広大なものであることが分かったのは、一七九二年、アメリカ人船長ロバート・グレイがコロンビア川河口を発見してからである。後述するルイスとクラークの探検隊がこれを確認することになる。一七九三年には、スコットランド人アレクサンダー・マッケンジーが内陸部から太平洋に達し、初の大陸横断に成功しているが、その探検物語が一八〇二年にロンドンで出ると、アメリカ大統領トマス・ジェファソンは焦った。この大陸北西部の玄関口となる地（オレゴン州）は当時ロシアを含めた列強が狙っていた要衝で、オレゴンなくして太平洋への出口はなかった。ナポレオンにはこの戦略的重要性が分からなかったのである。

他方で、ジェファソンはミシシッピ川の航行の自由やニューオリンズの港の利用に支障が出ることも恐れていた。そこで秘密協定を知った彼は先手を打った。フランスの総督が赴任先のアメリカに向かっている頃、ジェファソンの使節はフランスへの洋上にあつた。後者の使命は、ナポレオンと交渉してミシシッピ川のデルタ上にあつて航行の要となるニューオリンズ島を購入することであつた。使節ジェームズ・モンローとパリ駐在アメリカ大使ロバート・リヴィングストーンは巨額の購入資金を要求されるものと覚悟していた。ところが、ボナパルトの答えはびっくり仰天させるものだった。なんと、同額でルイジアナ全領土を売るといふ！今日の金で約三億ドル、僅かこれだけで、アメリカは一挙に国土が二倍になったのである。二人の使節はジェファソンに伝える間もなく、直ちに協定にサインした。

ただしこれは、アメリカ議会においてさえ、だだっ広い砂漠の購入など無駄であるという異論が出て、ジェファソンはその弁護に努めざるを得ないようなものだった。おそらく当時は、この広大かつ豊かなルイジ

アナの真の姿はナポレオンにもアメリカ議会にも分からなかったであろう。もっとも、こうした事例はよくあることで、一八六七年、アメリカがロシアから極寒不毛の地アラスカを買ったときも同様で、当時の国務長官スワードは「愚かなスワード」と指弾されたが、後に豊かな金脈、大油田が発見され、莫大な富をもたらしている。だがルイジアナはアラスカの比ではない。ナポレオンの思惑とは裏腹に、ジェファソンはロンドンに借金してこれを購入したのである。やっとフランス総督が到着し、一八〇三年一月三〇日、スペイン国旗がフランス国旗に替わったが、ひと月もしない一二月二〇日、ニューオリンズの空に翻っているのは星条旗であった。

かくして、ルイジアナは公式にアメリカの一八番目の州になり、後の西部征服とともに大西洋から太平洋までのアメリカが実現することになる。フランスがルイジアナを保持していたならば、歴史は別な展開をしたであろうが、ナポレオンの戦略というよりむしろその短慮による譲渡のために、フランスは無尽蔵に近い富の源泉を失い、アメリカ大陸との臍の緒は切れてしまうのである。二〇〇三年一月二〇日、Louisiana Purchaseの二百周年記念の行事が催されたが、州知事が招待したアメリカ大統領、フランス大統領、スペイン国王の誰一人としてこれに応じなかった。代理で出席したのは、アメリカの内務長官、フランス下院議長、駐米スペイン大使であった。この中で最も高位なのがフランス代表であるのは、歴史の皮肉であろうか。当時既にイラク開戦を巡って、アメリカと「古いヨーロッパ」、その象徴的存在のフランスとの関係は悪化の一途を辿っていた。まさに「危険な関係」が生じていたのである。

さて、このアメリカへの譲渡後のルイジアナはどうなったのか。確かに、ミシシッピ川を中心とした河川交通は活発になり、アメリカ北部の

紡績産業が綿を必要としていたので綿花の栽培はますます拡大発展していった。しかし、若いアメリカ共和国への新住民の統合はそう簡単ではなかった。スペインの統治者はフランス語を公用語として残したが、その後継者のアメリカ人はそうしなかった。また北からの入植者は英語話者のプロテスタントで、先住のクレオールとアカディア人はフランス語話者のカトリックであり、唯一の共通点は奴隷制度だった。ルイジアナ人五万人の半分が奴隷だったという。それが、一八一二年、第二次米英戦争とも第二次独立戦争とも称される戦争が始まると、彼らはニューオリンズで一致団結して共通の敵と戦ったのである。今でもルイジアナにはフランスの痕跡が多く残るが、アカディア人は語が変形して今は「ケーンジョー」と呼ばれ、約三〇万人いるという。だがインディアンはアメリカの植民地化によりほぼ絶滅し、フランス人とインディアンの混血は社会からはじき出されているそうである。それでも、ルイジアナはナポレオン法典を適用しているアメリカ唯一の州であり、ニューオリンズの墓地にはフェルナンデス家、マリニー家、セグラ家などの墓石が並んでおり、かつての入植者の「古いヨーロッパ」が偲ばれるという。

ところで、こうして棚からぼた餅のようにして広大な領土を得た後の、アメリカ大統領トマス・ジェファソンの行動は迅速だった。何しろこのアメリカ「帝国」の父は独立宣言書のインクが乾く間もなく西部探検を考えていたのだから。彼は山の向こうへは一度も行ったことがなかったが、西部には魅惑されていた。彼は秘書のメリウエザー・ルイスとヴァージニアの将校ウィリアム・クラークに、大部分が未開拓のままの北西部を踏査・探検しよう命じた。ここから後世に残る二人の探検物語が始まるのである。この頃のアメリカ合衆国はまだ東海岸沿いに縮こまった

ように存在する、全くの小国にすぎなかった。人口は約五三〇万人で、その五分の一が奴隷だった。また大半は大西洋岸から一〇〇キロ以内のところに居住していた。ミシシッピ川流域以西もまだ推測と幻想の対象であり、地図の上だけでなく、人々の精神においても空白だった。ジェファソン自身、西部の山々にはマンモスがいるのではないかと思っていたという。それゆえ、ルイスとクラークの探検を初の「大陸横断探検物語」と言っても過言ではないのである。これはアメリカのもう一つの創世神話なのである。

「Lewis and Clark Expedition ルイスとクラークの探検」で知られる、この西部の処女地への大冒険が始まったのは、一八〇四年五月一日だった。アメリカが「帝国」の道を歩み始めたのは、二百年前のこの日からである。ルイスとクラークはセントルイスを船で出発し、ミズーリ川を遡っていくが、二人が目指す未知の幻想的な地には巨人が住んでいると思われていた。彼らはそこから中国との交通通商の道に通じる王道を発見しようとしていたという。コロンブスやクック船長同様、探し求めるものこそ見つからなかったが、彼らはロッキーマウンテンを越え、大陸を横断し、太平洋岸に達した後、またミズーリ川を下って、一八〇六年九月一三日にセントルイスに帰還した。彼らの持ち帰った地理的・科学的情報は後の西部開発に大きな貢献を果たしたのである。

この探検物語は米国以外では殆ど知られていないが、アメリカ人はこれを国民神話の頂点に置いており、「内戦（南北戦争）」がわれわれの『イリアス』であれば、ルイスとクラークの探検はわれわれの『オデュッセイア』だ」という。この探検物語はそれだけで一種の百科事典のようなもので、探検家たちは日記に百万語以上を書き残している。これは人間がヒーローだが、川、山、滝、峡谷、急流、分水嶺、そして大洋など

の大パノラマも登場するいわば大河小説だ。そこにはドラマも奇跡もあり、グリズリー、足を引き裂くサボテン、最後は食べられてしまう馬、雪、飢え、寒さの恐怖もある。探検隊の一行は、ルイスとクラークの他に約三〇人の兵士や通訳が随行するが、その中にシャルボノというフランス人がおり、ミズーリ川上流で一隊に加わるが、ベレー帽をかぶったこの男はつねにモダンな諷刺を込めて描かれているという。そしてたった一人の女性があった。彼女は若いインディアンで捕虜の身だが、このフランス人の妻だった。サカガウエアという名前で、ショショ二族の居住域ではガイド役として働いた。彼女はふた月の赤ん坊を抱えていたが、この男児ジャン・バティストは歩く前にロッキーマウンテンを越えたのである。一般に、イギリス人やアメリカ人と違って、フランス人はインディアンと婚姻関係を持った。ここでも、フランスとアメリカ、そしてインディアンが人類学的に交差している。

さあ、物語の登場人物は揃った。筋はどうか。残念というか当然というか、物語風の筋はない。ルイスとクラークも、彼ら以外に日記を付けていた四人の一人ガース軍曹も含めて、探検・調査という使命に忠実で、事実の記述に徹しており、感情移入や印象批評的なものはないという。インディアン部族社会にまつわるエピソードがないわけではないが、情報の収集・記録が主目的であったのである。例えば、科学的・博物学的冒険物語風に、一七八種の植物と一二二種の動物の新種が報告されている。これは恐らく、探検を命じた指揮官ジェファソンの好みも反映しているであろう。この米国第三代大統領は多彩な能力をもつ驚くべき人物、また驚くほど複雑な人物だったようである。例えば、測量技師だった父の性向を受け継いだのか、彼は、人間を含めて動物や植物種を収集・測定し、一覧表を作って分類することが好きだったという。ヴァージニ

ア州のモンティセロの彼のプランテーションでは、同時に七冊の本を開いたままにしておけるような回転機を作らせ、農場や庭園の状態を点検し、一七〇種類の果樹と三三〇種類の多様な野菜の出来具合を見ていたそうである。

ジェファソンはまた駐仏公使（一七八五―一八九年）を務め、フランス革命も目撃しているが、フランスの友人たちを驚かしたり説教したりするのが好きだったらしい。例えば、浩瀚な『博物誌』を著わしたデュフォン伯爵に対する場合がそうである。一八世紀半ば、フランスでは、この高名な王立植物園園長のデュフォンを中心にして「新世界論争」なるものが起こっていた。つまり、新大陸ではその気候風土のためにあらゆる動植物が旧大陸の同種類のものより劣っているとされていたのである。

デュフォンの傘下、多くの博物学者たちがこれに付和雷同するが、誰一人大西洋を渡ったことはなく、彼らにとって、新大陸の地は「切り立った山がそびえ立ち、森と沼に覆われた、広大な不毛の砂漠」のイメージだった。中には、アメリカの白人種は退化しているという説を唱える者までいた。詳しくは後述するが、ジェファソンはこうした偏見を打破すべく奮闘したという。彼は、その唯一の書『ヴァージニア覚え書』で、とくにデュフォンに対して、数頁にわたって逐一反論を試み、旧大陸の最大獣の熊と新大陸のバイソンを比べてみよと反撃している。そして実際、一七八七年、パリに北米産の大鹿 moose の剥製を送らせて、ヨーロッパのトナカイはこの「退化した」動物の腹の下を通れるでしょうという、皮肉な献辞まで付したという。デュフォン伯爵殿は真実を知り、偏見を修正する間もなく死んだそうだが、その誤謬と罪は大きい。

ともあれ、大統領ジェファソンの命を受けて、ルイスとクラーク率いる「発見隊」は一八〇四年五月二一日、セントルイスより少しミズーリ

川上流沿いのセントチャールズという小さなフランス人の村から、四八人（当初数）を乗せたキール船と二隻のカヌーで出帆した。積載物は一〇トンの物資、『ルイジアナの歴史』、植物百科事典、天文暦、携行食用のスープ六四キロ、消化剤五〇ダース、スプーン一四四本、フラノのシャツ四五着、大鍋八つ、銃用火薬六〇キロ、インディアンへの贈答用真珠一〇キロなどであった。

そして一八〇六年九月二三日、獣の皮をまとった姿で、往復一万二三〇〇キロを踏破して帰還した。その間、ミズーリ川の滝を大変な苦勞をして船を担ぎ挙げて乗り越えたり、皮膚に切り傷ができるほどの堅い雹に打たれたりした。三七頭のグリズリーに出くわしたり、病死した者を埋葬したり、五〇ばかりのインディアン部族にも出会った。インディアンは彼らを殺すこともできただろうが、幸運にも、食糧をくれて通してくれたのである。探検隊はバイソン、リス、ビーバー、馬、鮭、羚羊、鱒、ヤマアラシ、白鳥、狼などありとあらゆるものを食った。インディアンから買った犬一九三匹も。生きて帰るためには、ルイスはコロンビア川下流域のチヌーク族に軍服や四角に切り裂いた星条旗さえ布地代わりに売らねばならなかった。それでも、彼らは八六三日間前進し続けた。We proceeded on という表現が日記の毎頁に出てくるという。これは探検隊の象徴となり、今なら move on というところをそのままにして二百年祭のティンシャツに描かれたのである。汽車で大陸横断が可能になったのは一八六九年、車で可能になったのは一九〇三年である。ルイスとクラークの探検隊の偉業のすごさが分かるうというものである。

さて通時的に「歴史に刻印される日付」をもとにフランスポーアメリカの関係史の一端を見てきたが、それを前述の三つのエピソードよりもっ

と象徴的かつピトレスクに物語る出来事が南北戦争時に起きているのである。本章のエピソードとして、フランス—アメリカの関係がいかに「古いヨーロッパ—旧大陸」と交差し、複雑に絡み合っているかを見ておこう。

一八六四年六月一九日、日曜日。英仏海峡にのぞむシェルブル。土曜日の朝から、この小さな港町が時ならぬパリ風の着飾った群衆でごった返していた。普段は裾広がりスカート、クリノリーヌ姿のご婦人よりも軍服姿が多いのである。第二帝政の上流社会がビアリッツやドーヴィルから、このノルマンディの小さな半島コタンタンにある厳めしい軍港に目を転じたのだろうか。鉄道会社がパリのサン＝ラザール駅—シェルブル間の週末往復切符を売り出すと、たちまち売り切れた。だが翌朝日曜日のパリ行き列車はがらがらだった。好天気の日曜日、六月の陽光も、降って沸いたような紳士淑女のさんざめきも、汽車賃の安さも、この気の早い避暑客たちを引き留めたのではない。一夜にしてシックな保養地と化したシェルブルに、彼らはノルマンディの潮風に吹かれるためではなく、英国エプソムのダービーよりも興奮し、「タンホイザー」の初演よりも心躍るようなスペクタクルを見ようとしてやってきたのだ。まさに闘牛でも見るように、血の匂いを嗅ぎに来たのである。この上流人士たちはみな海上の一大合戦、いわば古代ローマの模擬海戦の現代版を見物に来ていた。即ち、この一九日、南北戦争がコタンタン沖に巡業に来たのである。演目はこうである。「北軍対南軍、ヤンキーの巡洋艦対南部連合軍の私掠船、連邦軍キアサージ号対南部連合軍アラバマ号」。

野次馬どもが、パリッ子もノルマンディ人も、軍人も市民も踵を接して押し寄せ、空き地、防波堤、岸壁など至るところで何も見逃すまいと

肘を付き合わせて並んでいた。沖合が見通せる地点は特等席で、そこを目指して辻馬車、軽四輪馬車、幌付き四輪馬車で駆けつけた群衆で大混乱だった。一握りの特権的観客は大型艇で海に乗り出していた。一〇時よりずっと前に観客全員が各人の席に着いていた。さあ、合戦の始まりである。だが、なぜ英仏海峡のノルマンディ海岸沖でアメリカ南北軍の戦いが行われるのか。

一八六四年、アラバマ号は *Hull* つまり、伝説的な海賊船だった。二年間、追ってくる連邦軍の巡洋艦の攻撃をもとめせずに、西インド諸島から東シナ海に至る海域で北軍側の商船隊を恐怖に陥れていたのである。この逃げ足の速い海賊船が相手方の船舶に与えた被害はあまりに大きく、戦争後、合衆国はこのような船の建造を自国で許容したとしてイギリスに莫大な損害賠償を請求した。実際、アラバマ号はリヴァプールで秘密裏に建造され、「レジャーボート」のように装って船出し、武器や大砲を受け取って、南軍の旗を掲げたのはポルトガル沖のアソレス諸島においてであった。これは「アラバマ要求」という事件で、国際仲裁法廷で評決の結果、イギリスは中立国の義務を守らなかつたとして、一五五〇万ドルの賠償金を金で支払う羽目になったのである。だが実を言えば、これは賠償金を支払って済むような問題ではなかつた。アラバマ号の運命は、外見上中立の立場を表明していたとはいえ、実際は英仏両国で採られた、曲がりくねった南軍支持政策と不可分のものだったのである。両国ともそれぞれの立場から新興国のアメリカ合衆国が強大化するのを歓迎せず、その台頭を恐れていたのだから。

初航海から二年後、六二回の拿捕・海賊行為を行なった後、アラバマ号は英仏海峡に戻ってきたが、船体は破損疲弊し乗組員も疲れ果てており、修理と休養のためシェルブルに寄港した。そしてやはり中立国で

あるフランスに滞在許可を求めたのである。だが条約により、中立国は交戦国の船舶のいかなる修理や戦力増強の工事も禁止し、寄港時間を七十二時間に限っていた。問題はシェルブルで解決できるものではなかった。しかしながら、解決策が見つからないまま、事態は急展開する。三日後には、北軍のキアサージ号が停泊地の出口に現れたのである。まさに挑戦である。アラバマ号船長セムズは敵艦船長ウインスローとは同窓である。セムズは修理を諦めて、満身創痍のまま挑戦を受けた。勝負は歴然としていた。木材で船底被覆してカムフラージュしていた重装甲艦キアサージ号に、傷だらけのアラバマ号が勝てるはずはなかった。勝負は数分間で決まった。アラバマ号の船長セムズは戦死もせず敵の手にも渡らなかつた。近くで見物していた南軍支持派の富裕なイギリス人のヨット「ディアハウンド」号に救われ、サザンプトンに連れ帰られた。押し寄せていたバリからの群衆はちょっと失望して町に散開し、駅へと向かった。

このように南北対決の海戦はあつてなく終わったが、その南北戦争における軍事的な意味は大きく、新興国アメリカと旧大陸の英仏との関係を語る上でも重要でありかつ象徴的である。ここでは詳述はできないが、英国以上にフランスでは、この戦争で南軍が勝利し、アメリカ連邦が瓦解し、二つの共和国が生まれるのではないかという期待が強かった。当時のフランス外交にとって、アメリカの南北分割は夢であり、大陸を北、南、西と三分割する幻想を抱いた者さえいたという。それゆえ、フランス語では、この南北戦争は内戦 Civil War ではなく、期待を込めて Secession（分離・離脱）戦争と呼ばれている。アラバマ号の沈没とともに潰えたのはこの期待、つまり帝政フランスの秘かな夢でもあったのだ。そしてこの結末が後には、仏米の「危険な関係」を育む導火線に繋がっ

ていくのである。

興味深いことに、この夢の崩壊、英仏海峡の「源平合戦」を描いた画家がいる。印象派の創始者、近代絵画の父とも称されたあの『草上の昼食』の画家エドゥアール・マネである。恐らくマネは一八六四年のこの海戦を実際に見てはいないかもしれないが、『南北戦争を臨むバルコニー』と題されたこの絵は、戦い以上に、この戦いに向けたフランスの眼差し、アメリカの内戦に向けたフランスの好奇と期待の眼差しを表わしていると思われる。まさにこちら、絵を見る者が沖合いの砲撃戦をバルコニーから覗き見ているようなのである。この絵は当時物議をかもししたが、単なる戦争画ではなく、フランス人の願望とルサンティマンが潜む想像空間を描いたアレゴリックなものである。パリの富裕な司法官の家に生まれたが、画家志望を反対され、一時船員を志し、ブラジルにも航海したことのあるマネには、この海の戦いに何かノスタルジーでも覚えたのであろうか。

ともあれ、アメリカ、イギリス、フランスが絡んだこのシェルブル沖の海戦は、全く形を変えて現代に繋がっている。二〇〇四年一〇月六日早朝、シェルブルの停泊地の付近で、グリーンピースの活動家数名が出来合いの焔炉で暖をとっていると、舷灯の光が暗闇を裂くようにして現れた。西部要塞の灯台の光束にはらわれて浮かんだ、貨物船の背後の金属コンテナの白いシルエットは、まぎれもなくイギリスの海運会社パシフィック・ニュークリア・トランスポートの二隻の内の一「パシフィック・ピンテイル」号だった。他の一隻は武装した護衛艦「パシフィック・ティール」号だった。このカーゴは二週間前、アメリカのチャールストンから米軍のプルトニウム一四〇キロを積んで入港してきたのである。アラバマ号の場合と違って、今回は天下に公開された一大スペクタ

クルではなく、入港時刻は知らされない秘密裏の作戦だった。シェルブール港は塹壕陣地と化して、フランス海軍のボートが港湾内を行き交い、上空を二機のヘリコプターが警戒飛行していた。観客もパリの上流界の紳士淑女ではなく、グリーンピースの数名と千人以上の憲兵、機動隊、保安隊、兵士たちであった。しかし、ここに登場する役者たちは役柄こそ違うが、一八〇年前前の海戦時と同じくフランス、アメリカ、イギリスである。因みに、このシェルブール港には日本の核燃料再処理物質を運ぶ船舶も出入りしている。またアメリカから運ばれた一四〇キロのプルトニウムは長崎に落とされた原爆の約二〇倍分にあたり、アメリカはロシアとともに各々が三四トンもの不要かつ危険な軍用プルトニウムを抱えているという。

かくして、政治外交を舞台にした仏米の危険な関係とは裏腹に、グローバリゼーションの現代では、一九世紀半ばのアラバマ号事件の時代と違い、世界がより複雑微妙に絡み合っており、別な意味での危険な関係が存在していると言えよう。「時代に刻印される日付」ではなくとも、歴史は続いているのである。

参考文献

- Tocqueville : Oeuvres, 3 vol, Bibliothèque de la Pléiade, Gallimard, 1992-2004
- Chateaubriand : Oeuvres romanesques et voyages, I, Bibliothèque de la Pléiade, Gallimard, 1969
- Philippe Roger : L'Ennemi américain—Généalogie de l'antiaméricanisme français, Edition du Seuil, 2002

- Henriette Walter : Homni soit qui mal y pense, Robert Laffont, 2001
- Jean-Marie Colombani et Walter Wells : France Amérique—déliasions dangereuses, Editions Jacob—Duvernet, 2004
- Daniel Cohen : La mondialisation et ses ennemis, Grasset, 2004
- 松村 起、富田虎男編著・英米史辞典、研究社、二〇〇〇年
- その他、フランス紙 Le Monde, 週刊誌 L'Express, Le Nouvel Observateur などの特集記事